教門論疑問

柏原孝章

青空文庫

○教門論疑問　第一

余このごろ西先生の教門論を読に、その文真切、その義奥妙、反復数回発明するところ少々ならず。しかして窃おもう、その立論の旨おおいに古説と同じからざるあるをもって、看者胸中の先入を一洗するにあらずんば、おそらくはその真意の向うところを認めざらんことを。よりて、余いま固陋を省ず、その了解し難きゆえんの意を摂録し、あえて先生に質す。もし先生の垂教を忝せば、あに　ただ不佞の幸のみならんや。

およそ政を行い教を布く、まず信を人に得るにあり。信ぜられてしかるのちに令行れ、教立つ。いまだ信ぜられずんば、令して行れず、戒め守られざるなり。これを信ぜしむるの道同じからずといえども、人をして疑わしめざるに至ては、すなわち一なり。それすでに疑わざるに及んでは、水火をも踏ましむべく、木石をも拝せしむべし。けだし信の難きにあらず、これを信ぜしむるを難しとす。すなわち徳をもって信を得る者あり、術をもって信を売る者あり、人のこれを信ずるや、いまだかつて知らずして信ずる者あらず。それこれを信ずるのはじめ、目これを見、耳これを聞、心これを察し、その信ずべきを知て、しかるのちはじめて疑わざるに至る。

昔し洋人はじめて印度に航する者あり。王に謂て曰く、臣が国、冬日あり、水凍結して晶の

ごとく、鏡のごとく、堅きこと石のごとしと。王己を詐るとなしてこれを殺せり。王いまだかつて見ず、いまだかつて聞ず、またいまだかつてこれを察せず。王のこれを殺す、また宜なり。ゆえに自ら省て知らずんば、何によりて自ら信ぜん。自ら信ぜずんば、なんぞよく人を信ぜしめん。古人身を殺して信を証せし者、少なからず。しかれどもその成功の跡を見れば、あたかもはじめより知らずして信ずる者のごときあり。いわゆる知らず知らず帝の則に従う、これなり。これ、これを化という。そのすでに化するに及んでは、人これを如何ともすべからざるものなり。しかれども信の心に根する、深きものあり、浅きものあり。深きものは動し難く、浅きものは揺し易し。いま動し難きものにつきてこれを蕩揺せば、幹折れ、枝摧て、その根いよいよ蔓せん。有力者といえどもついにこれを抜くあたわざるべし。もしまずその浅きものを選てこれを芟艾せば、深きものも必ず孤立すること能わず。その勢ついに自ら仆れん。けだし釈迦は波羅門を破り、路得は天主教を新にす。わが邦の沙門もまたよく崇を興せり。これによりてこれを見れば、信あに遷すべからざらんや。

　西洋諸国たえて鄙野の教門なし。ここをもって人の好むところに任するもまた可ならん。かつ人々識高く、学博し。あに木石虫獣を拝する者あらんや。わが邦はすなわち否ず。愚夫愚婦の邪教に沈溺、惑乱する、言うに堪えざるものあり。しかして政府、あにこれを問わざるべけんや。われ聞く、国の王者あるは、なお家の父母あるがごとし。四海の内、みな兄弟なり。その父母兄弟の政を行う者は、その信するところ、自ら愚夫愚婦の見と同じからず。しかりしか

して子弟の沈溺するを見、手を拱して救わずんば、なんぞ父母兄弟たるにあらん、なんぞ民を保するにあらん、またなんぞ不仁不慈の謗を免れんや。

いま先生の言に云く、信に本末なし、ただ真とするものを信ずべきなりと。これなお瞽者をして五色を撰ばしむるがごとし。いやしくもかの愚夫愚婦をして、おのおのその真とするものを信ぜしめば、ついに草鞋大王を拝するに至らん。これ手を拱して人を棄るの道なり。また云く、匹夫匹婦の木石虫獣を信ずるも、その真たるを信ずと。ああ、これ何の謂ぞや。木石虫獣にして真たらば、なんぞ天を畏れん、なんぞ上帝を敬せん、またなんぞ教を用いんや。邪を拒ぎ、淫を斥し、仮を棄て、真を求むるは、教の大本なり。先生の云く、政治の権は教門の道とその本を同うせず云々、その主とするところ人民を聚め国を成し、不正をして正を犯すことを得ざらしめ、もってその治安を保す云々、もしそれ教門の道のごときはまさにこれとあい反す云々、全然その本を別にするものなり。またなんぞあい関渉して教門のためにして政治その害を受くることあらんや。余読てこの文に至り、おおいに了解し難を覚う。これ先生のいわゆる教門なるものは、正教を指すか、はた邪教を指すか、その意のあるところ、いまだ知べからざればなり。

今、仮に耶蘇の教をもってこれを論ぜん。耶蘇に十誡あり。その首の三条は敬神の道なり。四に曰く、父母を孝敬せよ。これすなわち帝王、官長より父母、師長に至まで、ともにこれを敬すべき義なり。五に曰く、殺すなかれ。人およそ忿恨、詈罵より人を傷け、人を害すべきこ

とを誡む。六に曰く、邪淫を行うなかれ。七に曰く、偸盗するなかれ。およそ人の財物を傷り不公平のことを戒む。八に曰く、妄証するなかれ。およそ人の声名を毀り、ならびに人を詐るなどを禁ず。九に曰く、他人の妻を願うなかれ。これ淫念を絶なり。十に曰く、他人の財を貪るなかれ。これ貪心を誡るなり。以上七誡のごとき、人もしこれを犯せば、みな必ず政府の罰を被るに足る。教門の道、ただ刑法の目を設けざるのみ。しかしてこれよりはなはだしきものあり。善人は天堂の賞を受け、悪人は地獄の罰を受く。その厳なる、五刑より厳なり。いやしくも人々よくこの戒を守るに至らば、五刑ありといえどもあによく措かざるを得んや。いやしくもこの道に反せば、なんぞよく人民を聚め、国を成し、不正をして正を犯すことを得ざらしめ、もってその治安を保つべけんや。

　これによりてこれを見れば、なんぞその本を別にすというべけん。またなんぞあい関渉せずというべけんや。政府、道なければ法律行われず、人民、教なければ政に服せず。教の人における、一日も無るべからず。飽食・暖衣・逸居して教なきは、禽獣に近し。教の政における、その帰、一なり。われ聞、文明の国たる、王家大礼あれば必ず教師を引てこれを司らしむ。天を敬するゆえんなり。民を信ずるゆえんなり。教の政における大なるかな。しかりといえども、教の道正しからざれば、その政に害あるまた少々たらず。これ人の好むところに任すべからざるゆえんなり。いやしくも教、正にしてかつ真ならば、人智の開明にしたがいてその信いよいよ深く、その政を行うにおいていよいよ欠如すべからざるものとす。もしそれ虚妄なるがごと

き、なんぞ信を開明の民に得るに足ん。いわゆる神教政治なるもの、その実は神教にあらずして、愚民を哄騙するの術なり。蛮王、一詭道をもって万民を統御せんと欲す。その滅亡に至る、また宜ならずや。

○教門論疑問　第二

物の弊あるは物の性なり。聖人といえども予めこれが備をなす克わざるなり。羅瑪の邦を復するや教門の力により、その敗るるやまた教門によれり。けだし当時の王と称する者、皆いわゆる仁義を仮て覇を謀る者なり。これをもってその法王に佞する、彼がごとくついに世を救うゆえんのものをもって、民を土炭に陥るるに至る。教門の弊、ここにおいてか極る。天運循環して路得氏興り、はじめてその弊を救い、しかして法王の権とみに衰う。けだしその弊のより起るところを察するに、教にあらずして人に存す。

これを治道に喩うれば、なお聖王の後、桀・紂を出すがごとし。それ邦の王を立つる、民を保するがためなり。しかして桀・紂の逆あり。人の教を立つるは世を救うゆえんなり。しかして羅瑪の災を免れず。しかれども一日も王者なかるべからず、また一日も教なかるべからず。それ教なるもの人心を攻るの具なり。心正しければ身脩る。身脩れば家斉う。家斉わざれば何をもって自主の権を立ん。身脩らざれば何によりて品行の高尚なるを望まん。心正しからざれ

ば、なんぞよく国の法律を遵守すべけんや。

今、先生、その内心を後にしてその外形を先にす。これを物に喩うれば、内心は物なり、外形は影なり。物、円なれば影もまた円なり。物、方なれば影もまた方なり。すなわち、その心正しければ、その行もまた正しからざるを得ず。これを中に誠あれば必ず外に形るというなり。いやしくも心を攻めずして、いたずらに外形を責るは、あたかも方物に就て円影を求るがごとし。およそ左道に惑溺する者は、財を貪り、色を好み、福を僥倖に利し、分を職務に忘れ、外財を軽じ、義を重ずるの仁なく、内欲に克ち、身を脩るの行なく、生て肉身の奴隷となり、死して魔鬼の犠牲となる。今天下の人をして、ほしいままに狐狸木石を尊信せしめば、人々その心をもって心となし、ついにその帰するところを知らざること瞭かなり。

しかしてこれに加うるに形をもってせば、これ教えずして殺すなり。かつその刑重きもただ一死に過ぎず。一人を殺す者は一死その命に抵て足るべけれども、万人を殺す者は何の刑をもって万人の命に抵すべきや。たとい、これを殺すもただ一死に過ぎざるのみ。しからばすなわち、あに公平の法と称べけんや。これをもって政の要は、徳を先にして刑を後にす。徳の本は教をもって人心を一にするにあり。明主は天下の心をもって一途に帰せしむ。ゆえに令すれば行われ、禁ずれば止む。もし天下の人おのおのその心をもって心とせば、日に百刑を施すといえども行われず。かつ天下の人、あによく挙て誅すべけんや。いわんや政府もまた人なり。いやしくも人ならばまたその信ずるところ、かならず人民と同一ならざるを得んや。政府もし、

はたして狐狸木石を信ぜば、これ狐狸木石の政府をして、狐狸木石の人民を治めしむるなり。あにまた奇ならずや。

○教門論疑問　第三

上世の歴史を見るに、たいてい荒唐疑うべきもの多し。しかれども数千年の後にありて、またこれを如何ともすべからざるなり。西洋太古の伝説もまた、往々疑うべきものあり。いわゆる諾威方舟を造り、その族人および禽獣の属おのおの一※を乗せて洪水を避しというがごときこれなり。

けだしその船の大小、人員の多寡、いまだ知るべからずといえども、動物の属その数億のみならず、あにことごとくこれを載するに勝んや。また獣類中にも残貪なるものあり、猛悪なるものあり、かつ肉食の獣は養うに蒭菜をもってすべからず。一頭を屠て数頭を養うべきものといえども、なおかつ一頭の配※を失うべし。いわんや数頭を殺め、わずかに一頭の餓を救べきものにおいてをや。その餓るやその勢必ずあい噉に至らん。あに上世の虎は目今の猫のごとく、太古の熊は今日の犬のごとしというべけんや。もし猛獣、毒蛇をして一舟の中に戦わしめば、人いずくんぞその災を蒙らざるべけんや。しかして諾威の舟アララに漂着する、数月の久きを経たりといえり。これあに理をもって論ずべけんや。

わが邦皇統連綿、天地と極なし。しかして上世の史を閲するに、天孫降臨すというもの、これを今日に徴すれば、はなはだ疑うべきがごとし。しかれども上世の人、なおかつ、これを非する者なきは、当時すでに確として証すべきものありて存せしならん。近来これを外史に比較するに及て、おおいにその疑を解くを得たり。すなわち百露古王の先もまた大氏地理書九十葉に見ゆ〉。かつその邦語の転化、おおいにわが国の法に類するものありという。またヲハイの女王額上に菊章を文する類〈和蘭人ムイ、ハンオーヘン氏著述、千八百五十五年鏤行、地上人民風俗通四百六十四葉の図に出ず〉、皇国学者をしてこれを論ぜしめば必ず云わん、わが邦上世の人、外国に流竄せらるる者、外境において国を興せる者なりと。しかれども王家あにこれをもって教を立るものならんや。百露の王すでに西班牙のために滅さる今に至て、天孫の国、万国と角立するもの、ひとり皇国あるのみ。百露の轍、それあに鑑せざるべけんや。たといここに人あり、いま現に雲漢より降るも、その言行神聖ならずんば、人いずくんぞ上帝の一子なりとなさんや。いわんやその子孫においてをや。いわんやその現に雲漢より降るを見ざる者においてをや。これ天子より庶人に至るまで、みな必ず教なくんばあるべからざるゆえんなり。

それわが国古より教あり、天然の教という。その法、人をして自ら本然の性に復らしむるものにして、すなわち誠心の一なり。しかれども世運ようやく下るに及で人事日に繁く、天然の教いまだもって邪を正すに足らず。これをもって名教を布き施せり。しかしてまた、いまだ下愚を移すに足らず。加うるに釈氏の教をもってす。しかりしかして虫獣木石の魔道、紛然とし

てその間に雑出す。今日にありてこれを見れば、そのはじめより教なきの簡なるをもって優れりとなすものは何ぞや。これけだし教法多端にして、人心を二、三ならしむればなり。教門の弊、ここにおいてか極る。この時にあたりて新教を分布し、旧弊を救わずんば、その政に害ある、言うべからざるものあらんとす。しかれどもこれを救う法、もしその宜きを得ざれば、その害もまた少々ならざるべし。あるいは云、天下最良の教を撰ぶべし。あるいは云、人々の好むところに任すべし。あるいは云、諸教を折衷して邦俗に合うべきを取るべしと。これみな、その一を知て、いまだその二を知らざるの論なり。それ大声は閭耳に入らず、上乗は凡夫を導くに足らず。君子の信ずるところは小人の疑うところとなり、老婆の安ずる所は少年の笑うところとなる。新を貪る者は陳を嫌い、古を好む者は奇を怪む。人心の同からざる、なおその面のごとし。ゆえに、いやしくもその人を得るにあらずんば、教法、正しといえども行われず、論説、理ありといえども信ぜられず。ああ信の難き、これを信ぜしむるを難しとす。教の道たる、あによく言語・文字の尽すべきところならんや。

青空文庫情報

底本：「明六雑誌（下）〔全3冊〕」岩波文庫、岩波書店
2009（平成21）年8月18日第1刷発行
底本の親本：第一「明六雑誌　第二十九號」明六社
1875（明治8）年2月26日
第二「明六雑誌　第三十號」明六社
1875（明治8）年3月8日
第三「明六雑誌　第三十一號」明六社
1875（明治8）年3月15日
初出：第一「明六雑誌　第二十九號」明六社
1875（明治8）年2月26日
第二「明六雑誌　第三十號」明六社
1875（明治8）年3月8日
第三「明六雑誌　第三十一號」明六社
1875（明治8）年3月15日
※「○教門論疑問　第一」「○教門論疑問　第二」「○教門論疑問　第三」をまとめて「教門

論疑問」としました。
※中見出し「○教門論疑問　第一」の初出時の表題は「○教門論疑問第一」です。
※中見出し「○教門論疑問　第二」の初出時の表題は「○教門論疑問第二」です。
※中見出し「○教門論疑問　第三」の初出時の表題は「○教門論疑問第三」です。
※校注者による冒頭の解説は省略しました。
※校注者による脚注は省略しました。
入力：田中哲郎
校正：岡村和彦
2020年4月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

教門論疑問

柏原孝章

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/